

=== 山崎合戦古戦場であそ歩 ===

JR 長岡京駅東口→勝龍寺城（近世）→神足遺跡→勝龍寺城（中世）→恵解山古墳→境野 1 号墳→山崎合戦古戦場跡碑→久我暇道→山崎離宮東黒門→西国街道→百々遺跡→円明寺架道橋（ねじれマンボ）→なかの邸（昼食）→阪急西山天王山駅

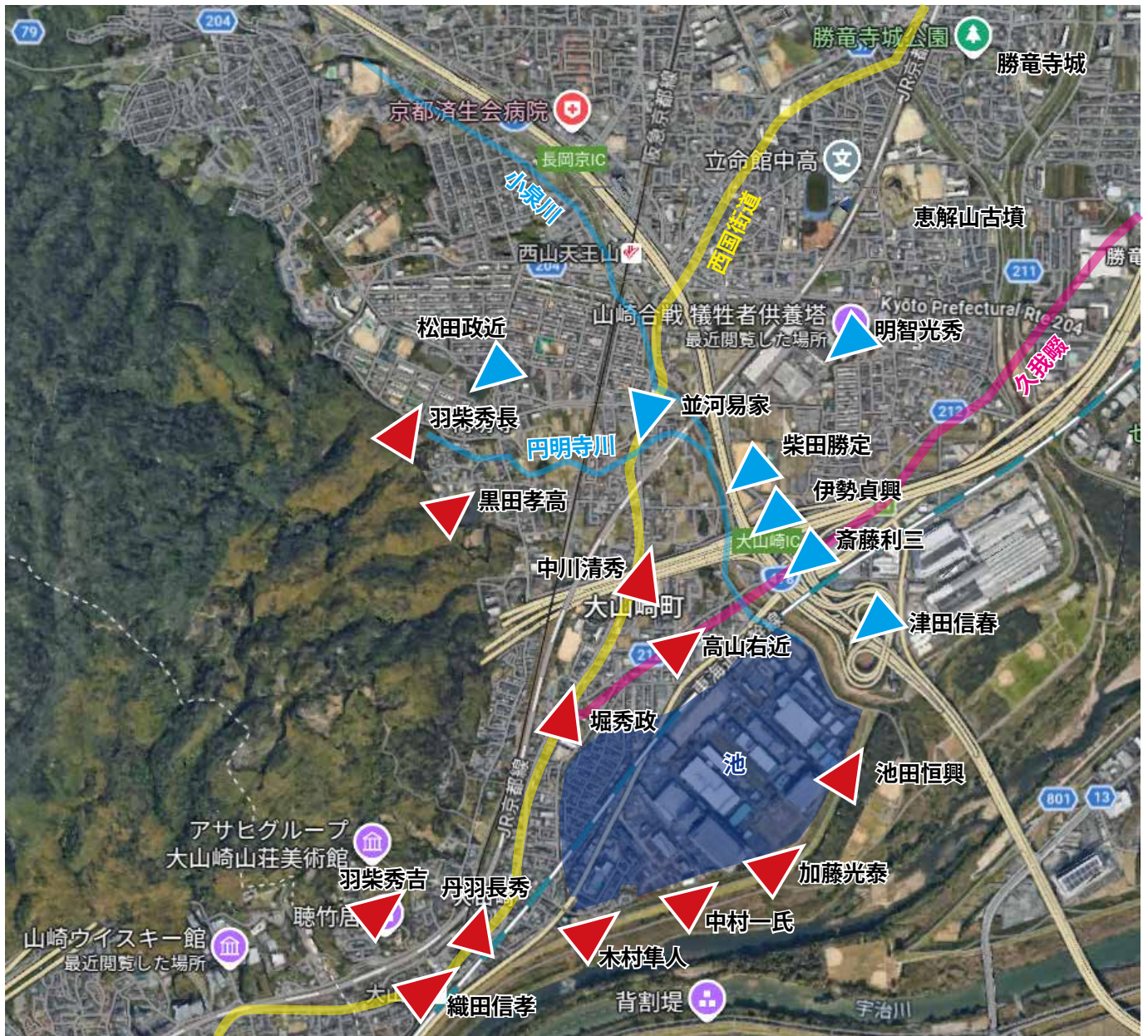
大河ドラマ「豊臣兄弟」の山崎合戦の回が終わった。今回の京都あそ歩は合戦の舞台となった山崎の地であそ歩。

細川氏の居城で、合戦時光秀の拠点となった勝龍寺城を見学の後、光秀本陣跡から古戦場を遠望。その後、光秀配下の斎藤利三らの陣のあった小泉川東岸から、激戦地となった小泉川西岸の久我暇道から西国街道を歩く。

最後は、国の登録有形文化財「なかの邸」で昼食、京都の酒の飲み比べを楽しみましょう。

光秀の本陣は御坊塚にあったとされるが、その場所は恵解山古墳と境野 1 号墳の 2 説がある。

小泉川流域は、旧石器時代から中世に続く遺跡が多く、恵解山古墳は、乙訓古墳群長岡支群の中期（5 世紀前半）の前方後円墳、境野 1 号墳は乙訓古墳群大山崎支群の前期（4 世紀前半）の前方後円墳である。

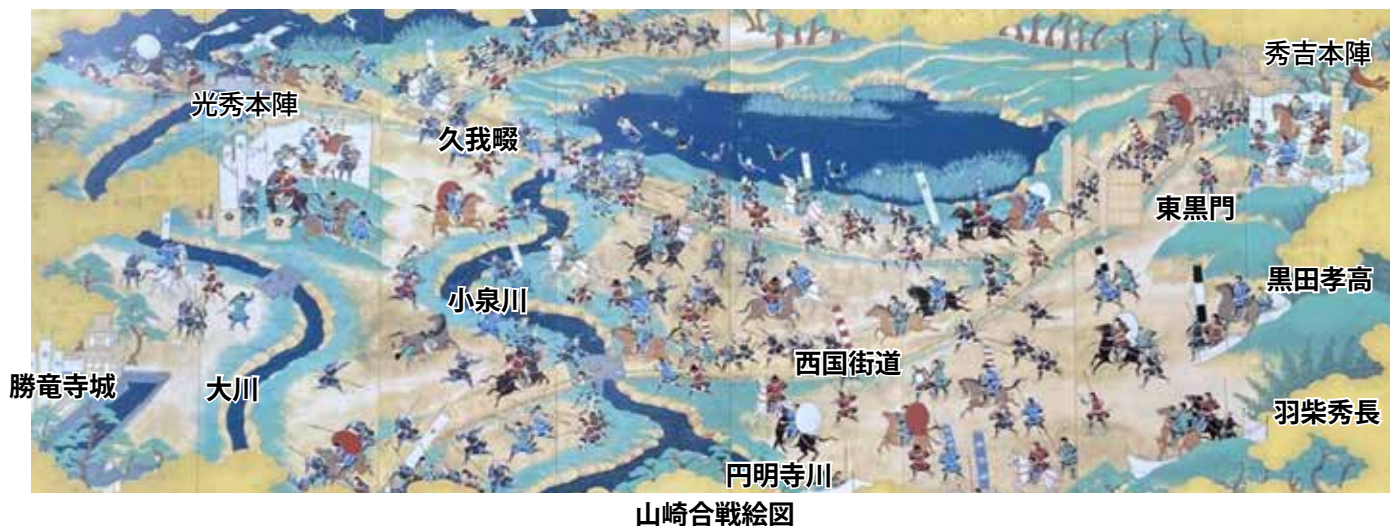


山崎合戦

天正 10 年 6 月 2 日（1582 年 6 月 21 日）早朝、明智光秀は、蛸薬師西洞院にあった本能寺に宿泊していた織田信長を襲い、信長は寺に火を放ち自害した。信長の

嫡男で織田家当主の信忠も、宿泊していた二条衣棚（本能寺の北側、烏丸御池西付近）妙覚寺から二条城に移って抗戦したが建物に火を放って自害した。

羽柴秀吉は備中高松城を水攻めしていたが、3 日に本



山崎合戦絵図



山崎合戦跡（拡大）



山崎合戦跡

能寺の変の報を入手し、ただちに毛利軍との和議を結ぶ。4日に城主清水宗治の自刃の検分を行い撤兵。7日に姫路城、12日秀吉軍4万、光秀軍1万4千が小泉川・円明寺川を挟んで対峙する。

羽柴軍は前夜に茨木城主中川清秀、高槻城主高山右近

が西国街道、久我噺の最前線に着陣。池田恒興らが池を挟んだ淀川岸に、黒田孝高、羽柴秀長が天王山山裾に布陣し、秀吉は後方の宝積寺に本陣を置いた。迎え撃つ光秀軍は御坊塚（恵解山古墳／境野1号墳）に本陣を置き、前面に腹心で旧幕臣の斎藤利三（春日局の父）や、丹波

並河城主並河易家、丹波柏原城主柴田勝定（勝家の従弟？）、丹波衆の松田政近らが東西に防衛線を張る。当時の山崎には沼地が広がっていたため大軍が通過できるのは天王山と沼の間の狭い空間に限られ、明智軍がその出口に蓋をした形となっている。

翌13日夕刻、高山隊の横に移動していた中川隊に、斎藤隊の右側に布陣していた旧幕臣の伊勢貞興隊が襲い掛かり、それに呼応して斎藤隊も高山隊に攻撃を開始。斎藤・伊勢隊の攻撃を受けた中川・高山両隊は窮地に陥るが、秀吉本隊から堀秀政の手勢が後詰に到着したことで持ちこたえる。天王山麓に布陣していた黒田・秀長と松田政近・並河易家両隊と交戦し、攻防が続いた。

池田恒興と秀吉家臣の加藤光泰、中村一氏、木村隼人が、淀川沿いを北上して廻り込み、津田信春を奇襲。丹羽隊・信孝隊も一斉に押し寄せ、光秀本隊の側面を突くような形となった。これを受けて苦戦していた中川・高山両隊も斎藤・伊勢両隊を押し返し、明智軍は総崩れとなった。光秀は勝龍寺城に退却、主力の斎藤隊は壊走し戦線離脱、黒田孝高らの隊と交戦していた松田政近、殿を引き受けた伊勢貞興が討死。

勝龍寺城は狭く、収容しきれない兵の脱走・離散が相次ぎ、その数は700余にまで減った。光秀は勝龍寺城の北門から脱出して居城坂本城を目指して落ち延びる途中、山科の小栗栖の藪で農民の落ち武者狩りに遭い竹槍で刺されて殺害された。

斎藤利三は堅田で捕らえられ六条河原で処刑される。稲葉氏に預けられた娘福はのちの徳川家光の乳母春日局。「春日」は、福が生まれた斎藤利三の居城丹波黒井城下の屋敷地名に由来する。

1. 神足遺跡

JR長岡京駅（旧神足駅）東口の辺りは、弥生時代中期の乙訓地域の拠点的な集落である神足遺跡の居住域が確認された場所である。

小畑川の右岸長岡第9小学校のあたりは、弥生時代中期には方形周溝墓や土墳墓があった墓域であり、居住域の外になる。

神足遺跡では、いくつかの地点で発掘調査が行われており、居住域の周囲に墓域が広がることが確認されている。また、この小学校の敷地を南北に貫いて、長岡京の



集落周辺の弥生の方形周溝墓
長岡第9小学校

朱雀大路がある。



神足遺跡 弥生の環濠
長岡京駅東口ロータリ北側



神足遺跡
南から方形周溝墓、土墳墓出土地付近
奥のビルが環濠出土地

2. 勝龍寺城（中世）

神足遺跡の南の森が、式内社の神足神社である。斉衡元（854）年に「山城国神足神」として、官社に列せられた神社である。祭神は天神立命、舎人親王とされている。境内には、勝龍寺城に関わる土塁や空堀がみられる。

勝龍寺城は発掘調査の成果に基づいて、本丸の門、櫓、塀、石垣などが復元されている。もともとは細川頼春が南朝方に対抗して暦応2年（1339）に、築いた神足城が始まりである。そののち、室町幕府被官の土豪西岡36人衆の一人神足氏の居城となった。

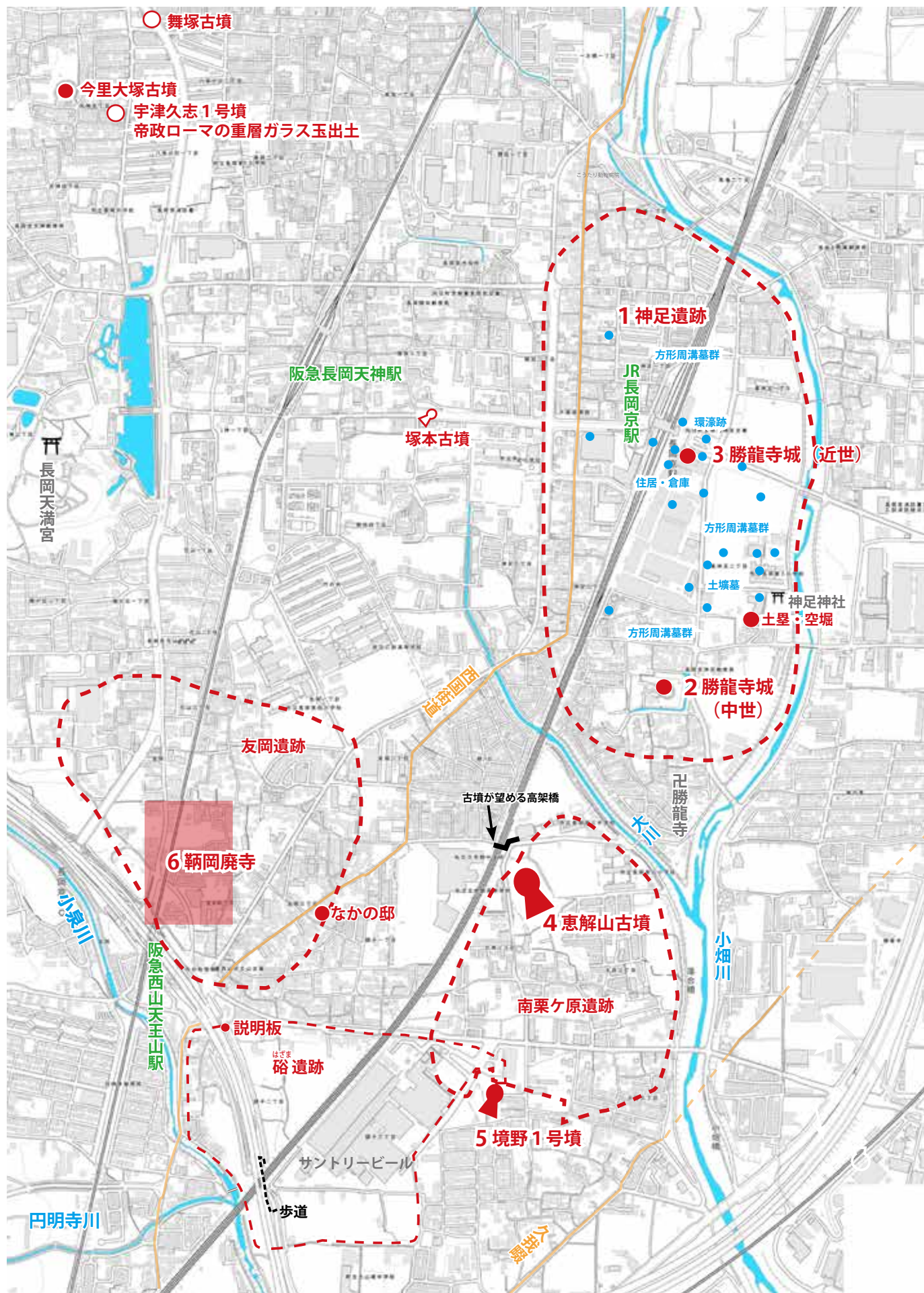
神足城は東西土塁を北辺に、南に延びる南北土塁を西辺とする一辺約50mの方形を呈する居館で、周囲は土塁と堀で囲まれていたとみられる。居館内の調査では、鎌倉～南北朝期の井戸跡や、溝、柱穴などが見つかった。

永禄11年（1568）に、細川藤孝が織田信長よりこの城を与えられて居城とし、元亀2年（1571）に改修した。神足氏は細川氏に従い被官となった。従わなかった土豪の物集女氏は城に呼び出され暗殺された。

勝龍寺城は、神足城北辺の土塁と堀を活かしてより大きなものに再編し、さらに東西に延ばして土橋の両側に横矢を設けた。一方、北辺以外の堀や内溝などは埋め戻されたが、土塁や城内の区画は新しい勝龍寺城の区画と



4



「国土地理院・地理院地図」に加筆掲載。 神足遺跡 ●は弥生中期遺跡（長岡京市誌より）

して取り込まれたと考えられる。細川藤孝の勝龍寺城は、神足城の機能を継承して利用し、再編に合わない堀や溝は埋め戻された。城は、中央の本丸とその西の沼田丸、その周囲には土塁や堀がめぐらされている。

細川氏が居城としていた間に、藤孝の長男である忠興のもとに、明智光秀の娘玉（細川ガラシャ）が嫁いできている。

細川氏が丹後へ移ったのち、天正10年（1582）には、山崎の合戦で、明智方の本拠とされている。

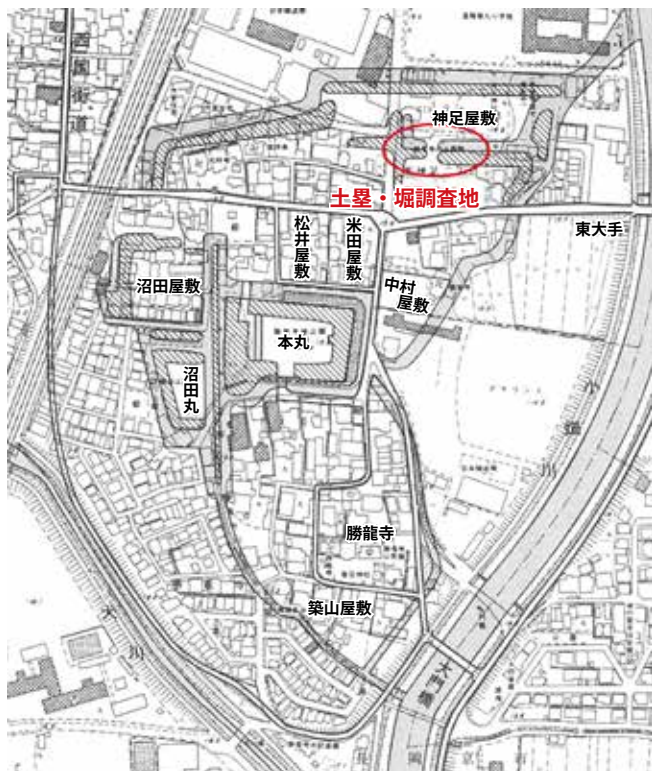


土塁、空堀と土橋



勝龍寺城外郭推定復元図

中世神足城復元図



勝龍寺城縄張復元図



復元勝龍寺城

3. 勝龍寺城（近世）

寛永10年（1633）から慶安2年（1649）の間、山城長岡藩2万石に封じられていた永井直清の居城であった、勝龍寺城の本丸がJ R長岡京駅（旧神足駅）東口付近にあった。慶安2年（1649）に2万4000石の加増を受け高槻藩に転封となったため廃藩となった。

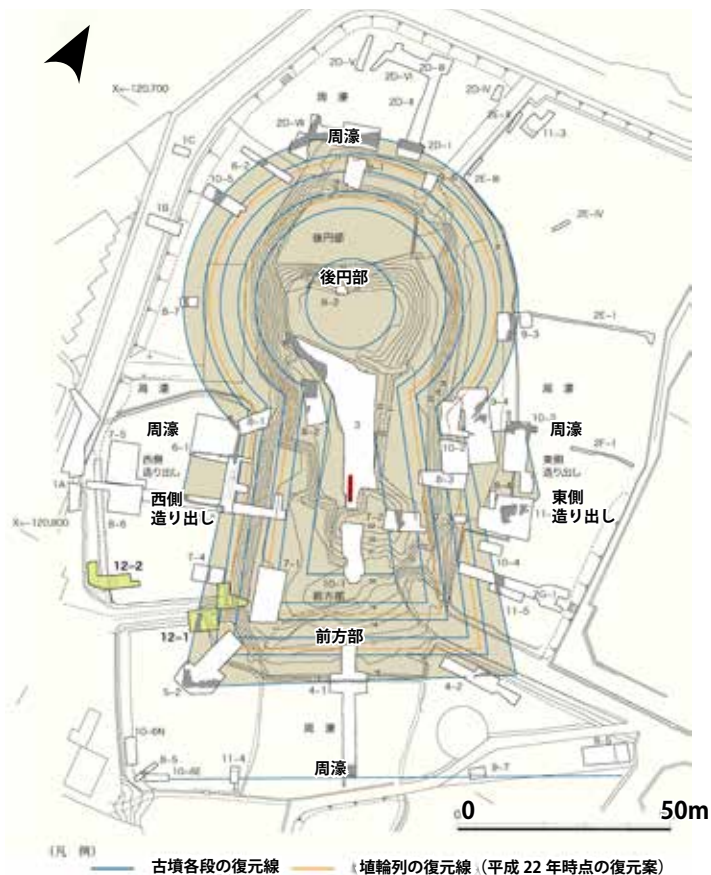


長岡京駅東口の石標

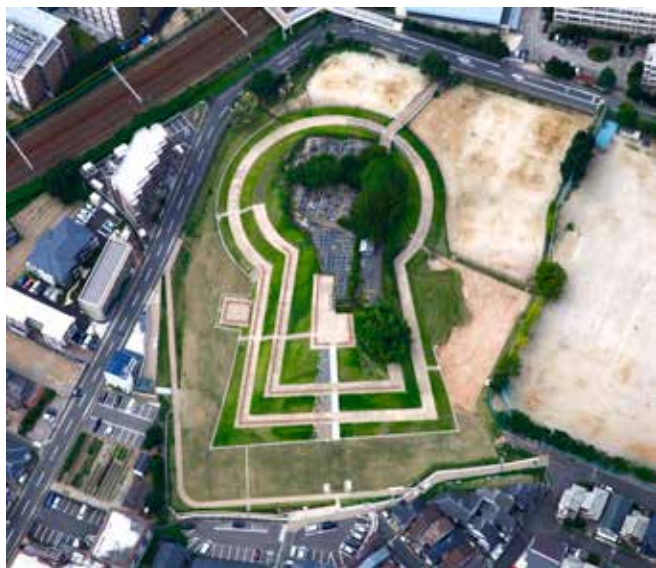
4. 恵解山古墳

後円部を北に向けた前方後円墳で、5世紀の前半でも新しい段階の築造とされている。後円部、前方部ともに三段築成で、規模は現状で全長約120m、後円部径約60m、高さ約8m、前方部幅約55m、高さ約6.5mである。周囲には盾形の濠をめぐらせている。後円部では埋葬施設は既に破壊されていたが、前方部では、総数で700点を越える鉄器が納められた施設が発掘された。それは、墳丘の主軸に沿って埋められた木柵のようなもので、長さ6m以上、幅約0.9m、深さ0.2mのサイズである。

その中に銃剣、鉄刀、短剣、短刀、ヤス状鉄製品、蕨手刀子、鉄鏃などの鉄器が整然と納められていた。これは、この古墳の被葬者が有していた強大な軍勢力を反映したものと考えられる。この時期に河内などでも大量の武器や武具の埋納の例が多く見られ、京都盆地におけるこの古墳の被葬者の立場を考えると興味深い。



恵解山古墳墳丘図



恵解山古墳（整備後） © 梅原章一



恵解山古墳（整備前） © 梅原章一

	葛野（榎原）	向日丘陵	長岡	大山崎
前期	1期	五塚原 元稲荷		
	2期	一本松塚	寺戸大塚 北山	
	3期	百々池	妙見山	長法寺南原 境野 1
	4期	天皇の杜	伝高皇陵	今里車塚 鳥居前
中期	5期	塚ノ本	牛廻り 唐子岳 2	今里庄ノ淵 恵解山
	6期			
	7期	巡礼塚 山田桜谷	南条	宇津久志
	8期	穀塚 下山田下園尾		舞塚 塚本
後期	9期	清水塚	物集女車塚	芝 井ノ内車塚 井ノ内稲荷塚
	10期	天鼓の森 山田車塚		
終末期		榎原廃寺	宝菩提院廃寺	今里大塚 乙訓寺廃寺 山崎廃寺

乙訓古墳群編年表

乙訓古墳群は、前期に前方後円墳が丘陵の上部に築かれ前方後方墳を含むのが特徴。

中期に入ると長岡支群の恵解山古墳を最後にいったん途絶えるが、中期後半になると葛野、長岡支群で築造が再開するが古墳の規模が縮小する。

前期の築造氏族として、葛野県主（かも氏）、山城国造（物部氏）一族の六人部（むとべ）連、中期以降の葛野、向日丘陵支群は秦氏などが考えられる。

終末期には古墳築造が停止して氏寺が築造される。



恵解山古墳と境野 1 号 1948 地図に加筆



恵解山古墳墳丘（西から）



恵解山古墳墳丘（北東から後円部）



恵解山古墳墳丘（北の陸橋から後円部）



復元された埴輪列と造り出し

5. 境野 1 号墳・明智光秀本陣跡

恵解山古墳の南 500m サントリー京都ブルワリー東側墓地北側に境野 1 号墳がある。

全長約 60m の前方後円墳で墳丘は地形を削り出した下段部分に盛土を施す 2 段築成で、前方部の東側のみ 3 段に築成されている。

墳丘の各段の平坦面には円筒埴輪列が、上段墳丘の斜面部分には葺石が備わる。

中心部付近の崖面をには白色の粘土の広がり確認され、埋葬主体部は、粘土槨であることがわかった。

北側の後円部墳丘を覆っていた上の中から腕輪を模した石製品などが出土し、東側くびれ部に付近から寄棟屋

根の家形埴輪や車輪石・石釧や太身の管玉、鉄刀の先などが出土した。

古墳築造された時期は、埴輪や腕輪形石製品から、古墳時代前期後半（およそ 4 世紀後半）と考えられる。

前期の境野 1 号墳が見つかったことは山崎地区で向日丘陵とは異なる首長系譜の存在が想定される。

境野 1 号墳は「山崎合戦」の時、明智光秀方の本陣が置かれた場所ではないかと考えられている。『太閤記』の記述に御坊塚に光秀本陣が置かれ、兵力は五千有余とあり、当地周辺の地形を考慮すると、境野一号墳上が本陣に利用されたものと考えられている。古墳のある場所は標高 25.2 m を測り、周辺と比べるとひと際高く、天王山や西国街道方向に視界がひらける。羽柴秀吉の軍勢と対峙し、味方の軍勢を把握して指揮するのにうってつけの場所と言える。

周辺で行った発掘調査では空堀跡とみられる遺構が複数発見され、合戦前夜から本陣の準備が進められ、秀吉軍を迎え撃つ準備を進めていたと考えられる。また火縄銃の鉄砲玉も出土し、両軍の激戦の様子が窺える。



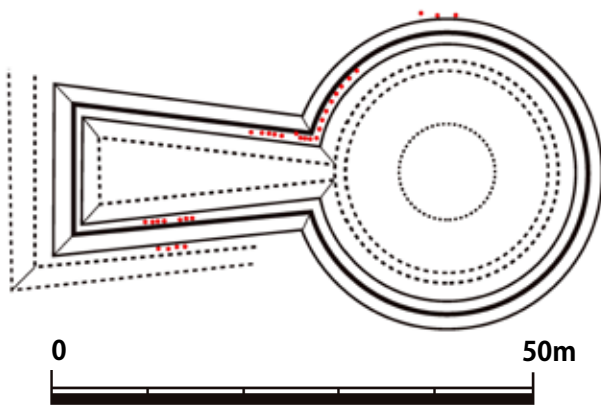
境野 1 号墳 前方部南西裾



境野 1 号墳 前方部南東から墳丘



境野 1 号墳墳丘復元図



境野 1 号墳墳丘図（赤丸は埴輪列）



半分近く削平された境野 1 号墳後円部

6. 鞆岡廃寺

恵解山古墳に沿って南下、しばらくして右折し、J R の東海道本線を越える。さらにそのまま西へ向かうと、西国街道にて、阪急西山天王山駅手前で、右手に（つまり北方）、老人保健施設 アゼリアガーデンがみえる。施設の北側を中心とした一帯に、鞆岡廃寺がある。創建に関わると思われる飛鳥時代の瓦（素弁八葉蓮華文軒丸瓦）が採集されており、山城でも有数の、古い段階に創建された寺院である可能性が高い。現在は開発が進み、



鞆岡廃寺 中央の建物付近

地上には痕跡は残されていない。

出土瓦には「田辺史牟也毛」と線刻されたものがあり、渡来系氏族である田辺氏との関係が注目されている。

7. 百々遺跡・第 3 次山城国府跡

大山崎町の役場のあたりは、百々遺跡で、遺跡の中央を南北に西国街道が縦断するが、この辺りでは、古代の山陽道を踏襲しており、付近での発掘調査により、道路の側溝からは 9 世紀代の遺物が出土している。この付近では 8 世紀末から 9 世紀後半の建物跡などの遺構が検出されている。「日本紀略」延暦 16（797）年の記事に「山城国治を長岡京南に遷す。葛野郡の地勢狭隘なるを以てなり」とある、長岡京南のものが、第 3 次山城国府と呼ばれ、この遺跡がその候補地のひとつになっている。



大山崎町役場から西国街道
向かい側の保健センターに百々遺跡説明板

8. 西国街道と久我瀬の分岐点

大山崎町役場から西国街道を南下すると久我瀬の分岐点がある。久我瀬は平安京の羅城門から南下する鳥羽の作り道につながり桂川右岸を東北から南西方向に斜向して走る道で、現在も、道路や畦で踏襲されている。もとの長岡京城を斜めに横切る。このことから、平安京遷都後に設定されたものであらうと考えられてきた。そして、長岡京市城の長岡京左京第 53 次調査で、この久我瀬の一地点が調査された。道路の側溝と四期にわたる路面が検出され、その最も古いものの造営時期は、平安遷都後の早い時期と考えられている。この道は、平安京と山崎津などを結ぶ為のものであり、山陽道経由であると地形

の起伏があるのに対して、平坦なコースであるという利点があった反面、低湿地が多いため水害などの被害を受けやすいという欠点もあったようである。いずれにせよ、このような計画的な直線道路が山崎を目指してのびていることはこの地の重要度を表しているといえるだろう。



西国街道と久我瀬の分岐点 松原三叉路

9. 山崎津跡

西国街道と久我瀬の分岐点の南の住宅地のマンションの前に、山崎津跡の説明板が立てられている。淀川を遡上して運ばれた物資の陸揚げ場所として重要な山崎津の考古学的な資料は、殆ど見つかっていないが、この地点で行われた発掘調査で9世紀末から10世紀にかけての舟入り状遺構や旧河道が検出され、また大量の土器や瓦などが出土し、当時の淀川の西岸ではないかとされている。ただ、津は一地点だけではなく、ある程度淀川の岸边に延びて存在したようである。



山崎津跡

10. 観音寺

急な階段を登った山の中腹にある観音寺は、山崎聖天の名で、桜の名所としても知られる。寺伝によれば、昌泰2(899)年、宇多法皇の勅願で創建されたというが、延宝9(1681)年に聖天堂を興して歓喜天を祀ると、京や大坂の大商人の厚い信仰を受けるようになったという。



観音寺参道には歓喜天の鳥居がある



観音寺本堂

11. 宝積寺

J R 山崎駅の東の踏切前の道をまっすぐ登っていくと、宝積寺がある。寺伝には、行基によって開かれたというが、明らかではない。寺には鎌倉時代の多くの仏像があり、また、安土桃山時代の三重塔がある。境内付近からは、飛鳥時代後半と奈良時代の瓦も採集されている。天平3(731)年に行基が山崎院を建立しているが、これがもともと川に近いところにあったのが、平安時代後期もしくは鎌倉時代前期に現在の宝積寺の場所に移ったのではないかと考える説がある。



宝積寺本堂



宝積寺三重塔

12. 自玉手祭来酒解神社（酒解神社）・天王山

天王山山頂にある酒解神社は、大山崎地域の産土神として鎮座する延喜式内社で乙訓地方で最も古い神社。江戸時代以前は天神八王子社と呼ばれ牛頭天王を祭神としていた。天王山の名は祭神の牛頭天王の天王から由来している。

本殿は江戸時代後期の建築で国の登録文化財に指定されている。

本殿横にある神輿庫は板倉形式という珍しい形式で、鎌倉時代前期の建築で重要文化財に指定されている。板倉は切妻造り本瓦葺きで、構造は分厚い角材を組み上げた形のもので非常に珍しい建物である。

天王山は摂津と山城の国に境にあり、南の男山丘陵と地峡を形成するため戦略上の要地となっている。山崎の合戦では小泉川を挟んで両軍が対峙し、天王山南麓に秀吉が陣を敷いた。天王山頂への登り道、八合目付近にあるの旗立松は山崎合戦の時、秀吉が味方の士気を高めるため老松の樹上高く千成瓢箪の旗印を掲げた所と言われる。山上一帯には度々城が築かれた。今日残る城跡は羽柴秀吉が山崎合戦の直後に築城したもので、山頂付近一帯には天守台跡、門跡、井戸跡、土塁跡、礎石等が残る。

天王山中腹には、元治元年（1864）禁門の変の時、戦いに敗れ天王山中で自刃した真木和泉守以下 17 名の眠る十七烈士の墓がある。

13. 離宮八幡宮・第 4 次山城国府

西国街道を西へ行くと、阪急を越えて道の北側にある第四次山城国府の説明板を過ぎると離宮八幡宮に到着する。一帯は大山崎遺跡群と呼ばれている。離宮八幡宮はもともとこの辺りにあった河陽離宮の一角に八幡神を祀ったものとされる。河陽離宮の成立についてはどのように考えられているのであろうか。



酒解神社 本殿



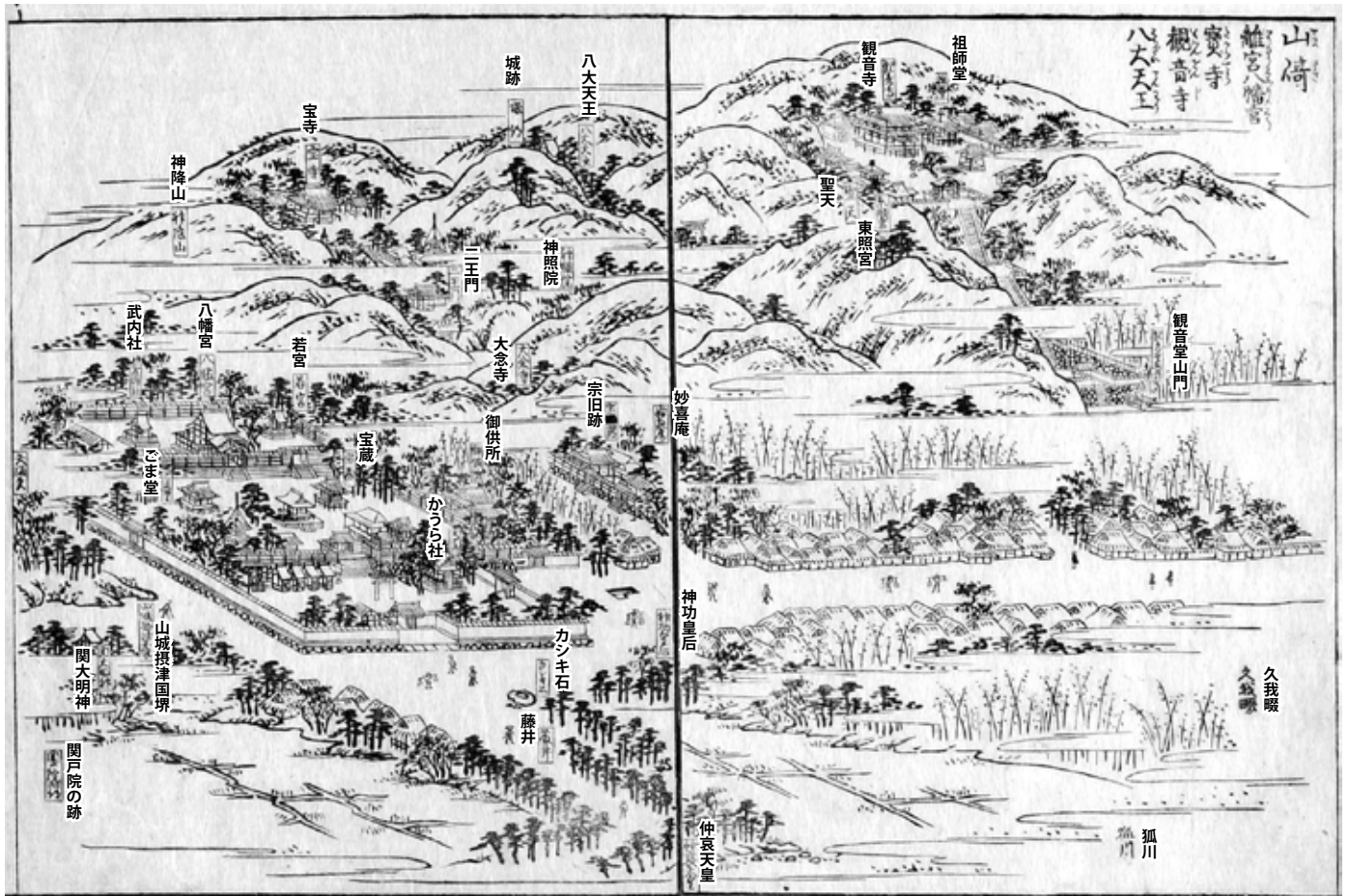
酒解神社 神輿庫



離宮八幡宮



離宮八幡宮 かしき石



都名所図会 天明6年(1786) 竹原春朝斎 (国際日本文化研究センター)

まず、長岡京遷都のころに、山陽道の通るこの辺りに山崎駅が没けられたと考えられている。そして、弘仁2(811)年に嵯峨天皇が付近に遊獵した際に、この山崎駅に滞在したのをはじめに、幾たびか、それを繰り返すうちに、弘仁年間に「山崎離宮」「河陽離宮」と名称が変わり、施設も整えられたようである。のちに、天皇の行幸がほとんどなくなり、貞観3(861)年には、ここが山城国府としても使用されるようになる。(第4次山城国府) 先の、説明板の地点では、10世紀代を中心とする遺物や、道路の側溝とそれに面した門跡と思われる遺構がみつまっている。



9～10世紀の山崎津模型

14. 山崎橋

この地での行基が行ったこととして忘れてはならないのは神亀2(725)年に山崎橋を架けたことである。橋は、その後いくたびも改修されたようであるが、文献記載をもとにすれば、11世紀には、廃絶したらしく、現在その場所は正確には分らない。

また、付近には相応寺という寺があった。『土佐日記』の承平5(935)年の、前土佐守紀貫之が任地から帰京する際の、山崎付近の記述によれば、山崎橋の近くの川岸にあることがわかる。

離宮八幡宮の境内にある「かしき石」は、その塔心礎であるとも言われるがはっきりとしない。

このように、この付近には多くの古代の遺跡があるが、その後中世になっても大いに繁栄をした場所でもある。(土佐日記)

十一日。雨いささかに降りて、やみぬ。かくてさし上るに、東の方に、山の横ほれるを見て、人に問へば、八幡の宮といふ。これを聞いて喜びて、人々拝みたてまつる。

山崎の橋見ゆ。嬉しきこと限りなし。

ここに、相応寺のほとりに、しばし船をとどめて、とかく定むることあり。この寺の岸ほとりに、柳多くあり。ある人、この柳の影の、川の底に映れるを見てよめる歌、さざれ波寄するあやをば青柳の

影の糸して織るかとぞ見る

15. 大山崎神人の油座

大山崎町歴史資料館の場所での調査では、15 世紀頃の備前焼の甕を埋めた遺構が検出された。大山崎神人の油座が、油の生産および販売において、専売権を有していたが、この甕の中の土を分析すると荏胡麻油の油脂分が検出され、油を貯えていたことがわかっている。街道筋には油を造る神人達の屋敷が並び油を貯蔵する倉を持ち、倉の中には大きな甕が半ば埋められた形で整然と並んでいた。当時の状況を彷彿とさせるものであろう。



離宮八幡宮の油祖像



油甕が出土した大山崎町歴史資料館付近

小泉川流域の遺跡

小泉川の河岸段丘や氾濫原には後期旧石器時代からの遺跡が認められる。

南栗ヶ塚遺跡では、旧石器時代後期のサヌカイト製ナイフ形石器を含む石器群が検出された。

縄文時代の最も古い時期の土器は、**下海印寺遺跡**から発見された早期の押型文土器片である。早期に属するチャート製**トトロ石器**が**碓遺跡**から出土している。前期には南栗ヶ塚遺跡から**北白川下層式**の縄文土器が住居跡に伴って検出され、中期には**友岡遺跡**から、段丘斜面に投棄された状態で、**船元式土器**が大量に出土した。中期末の**北白川C式**の時期には、**伊賀寺遺跡**で6棟の竪穴式住居および遺物が検出されている。また、大山崎町**脇山遺跡**でも北白川C式土器を含む土坑が検出されている。

後期初頭の**中津式土器**は**伊賀寺遺跡**で、後期縁帯文期には**伊賀寺遺跡・下海印寺遺跡**で遺構・遺物が発見されている。後期中葉の**元住吉山式土器**を伴う竪穴式住居跡は、伊賀寺遺跡で確認され、墓壙も発見された。墓壙2か所からは多量の焼骨が発見され、供献土器と考えられる注口土器が出土している。

縄文時代晩期に入ると、小泉川下流の大山崎町**下植野南遺跡**において突帯文の甕棺が検出されている。

弥生時代前期の遺構は、小泉川流域では発見されていないが、**碓遺跡**で土器が出土している。

弥生時代中期前葉には**南栗ヶ塚遺跡**や**下植野南遺跡**で石製

武器を伴う方形周溝墓群が発見され、中期後葉の土器は**碓遺跡**から発見されている。弥生時代末ではベツト状遺構を持つ多角形の竪穴式住居跡を含む竪穴式住居跡が**伊賀寺遺跡**や**下海印寺遺跡**で発見されている。

古墳時代前期には、下流に**境野1号墳**（全長約62mの前方後円墳）築造され、後期に入ると多くの竪穴式住居跡が**伊賀寺遺跡**、**下植野南遺跡**で発見されている。

頼岡廃寺では飛鳥時代から長岡京期の瓦が発見されて、奈良時代の建物としては、据立柱建物などが伊賀寺遺跡や**下海印寺遺跡**、**下植野南遺跡**などで発見されている。

【注記】

トトロ石器：石鏃に似た形の儀礼用の打製石器。全体に磨耗した痕跡がある。

北白川下層式土器（前期）：京都市左京区北白川で出土した連続爪形文、C字形爪形文、凸帯上に刻みまたは縄文の土器。

船元式土器（中期）：倉敷船元貝塚から出土した土器。爪形文、貝殻圧痕文、凸帯文、半截竹管による多彩な沈線文が特徴

北白川C式土器（中期末）：東日本の加曽利E式の影響を強く受けた、縦文様の深鉢・浅鉢・壺。

中津式土器（後期前葉）：縄文を施した後、文様区画以外を磨いて無文とした磨消縄文系の深鉢。岡山県中津貝塚を標式遺跡とし、瀬戸内・近畿地方を中心に分布。

元住吉山式土器（後期中葉）：神戸市西区押部谷の元住吉遺跡出土の標式土器。沈線間に細かい刻みや縄文を施す。



旗立松展望台より古戦場を望む

京機会関西支部 第11回京都あそ歩 2026.11.

=== 山崎合戦古戦場であそ歩 ===

下尾茂敏（奥島研 1973 卒）

個人使用に限定

参考文献

- ・ 橿原考古学研究所友史会報 平成 6 年 9 月 18 日「乙訓の里を歩く（3）」
第 399 回例会 第 348 号会報 川上洋一
- ・ 橿原考古学研究所友史会報 平成 5 年 12 月 19 日「乙訓の里を歩く（2）」
第 392 回例会 第 372 号会報 川上洋一
- ・ 長岡京市埋蔵文化財センターホームページ「遺跡の紹介」
- ・ 国土地理院航空写真
- ・ 長岡京市埋蔵文化財調査報告書第 41 冊 2000
- ・ 平成 28 年度芝古墳発掘調査資料 京都市文化財保護課
- ・ 勝龍寺城跡の土塁・空堀の発掘調査（長岡京跡右京第 1084 次調査）長岡京市埋蔵文化財センター '14
- ・ 恵解山古墳第 12 次調査（長岡京跡右京第 1029 次調査）
長岡京市埋蔵文化財センター '11
- ・ 京都府埋蔵文化財情報第 105 号
京都府埋蔵文化財調査研究センター '08
- ・ 大山崎町歴史資料館展示模型
- ・ 大山崎町観光サイト
- ・ 「幻の鞍岡廃寺に迫る」長岡京市埋蔵文化財センター
- ・ 大山崎町教育委員会現地説明板
- ・ 長岡京市教育委員会現地説明板
- ・ 京都府遺跡調査報告書「長岡京跡右京第 927 次・伊賀寺遺跡」